些細な事。

鴨居 青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
些細な事。

【Ｎコード】
Ｎ４０９０Ｙ

【作者名】
鴨居　青

【あらすじ】
些細な事。そこから恋が始まった。

ホムペのブログでＳＳをたまーに書いてます。
本編の課長のイメージを損ねたくない方は閲覧を控えた方が宜しいかも知れません。

きっかけは些細な事。1

きっかけはほんの些細な事だった。
いつも怒ってばかりのあなたが、私を褒めてくれたから。
満面の笑顔で笑って「お前ならやれるって分かってた」って言いながら頭を撫でてくれたから。
その後に「すまん、セクハラになるな」って慌てて謝ってきたのにも何故か和んでしまったから。
そんな、些細な事。

「竹原ぁ！こっちに来い！」
「は、はいぃっ！」
今日も課長の怒鳴り声が営業企画部に響く。
周りの同僚たちは何時もの事と分かっているので特に気にもせず机に向かっている。
ただ一人、怒鳴られた本人である私を除いて。
「竹原、今度は何やったんだよ」
向かいの席にいる同期の徳永がパソコンの画面から視線を逸らさずに小さな声で私に尋ねてくるのだけど、私にも何故課長がご立腹なのか分からなかった。
「わ、分からないよー。」
そう言いながらも足は課長の席へと向かう。
席に近づくにつれて課長の怒気を含んだオーラが肌にびりびりと伝わってくる。
課長は殺気だけで人を殺せると思う。そんな事を言ったら課長に何言われるか分かったものじゃないけど。
課長の席に着くと課長は私を見て書類を差し出した。
「お前、これ見てみろ」
そう言われて差し出された書類を受け取り、目を通してみる。

目を通して直ぐに何故呼ばれたのかが分かった。書類に記載された金額が明らかにおかしい。
「申し訳ありません！すぐ直します！」
「俺が目を通しておいたから良かったものの、取引先に見せてたら大変なことになっていたんだぞ。お前は注意散漫なんだよ。こういうミスが多い。気を付けろ」
課長はそう言いながら眼鏡を外すと目頭近くの鼻骨をつまむ様に揉んでいる。
ここの所課長は残業続きで疲れているようで、余計に申し訳なくなってしまった。
「お手数おかけして申し訳ありませんでした」
「入社してからもう半年以上経つんだから、なんでそういうミスが出てくるのかきちんと考えろ」
課長は眼鏡をかけ直すと、他の書類に目を通し始めたので私は一礼して自分の席へと戻った。
この職場に就いてもう7ヶ月経つのにこんなミスをやらかしてしまう自分の駄目さにへこみながら、元のデータを呼び出していると
「竹原また入力ミスったの？」と向かいの席の徳永が話しかけてきた。
「うう…それ以上は何も言わないで。今自分の駄目さ加減にへこんでいる所なんだから」
パソコンの画面に出てきたデータを見ながら間違っている金額の部分を直していく。
「へこむのもいいけど、今回は課長が先にミスを見つけてくれたんだから良し、と考えて次に繋げないと。いつまでへこんでいてもしょうがないだろ？」
「そうなんだけど…。」
徳永が言いたい事も分かる。取引先の人に目を通される前にこちら側で直ぐに気づいたのだから良かった。と考えて、入力ミスを繰り返さないようにすれば良いだけの事なのだ。

けれど、どうしても上手く気持ちを切り替えることが出来なかった。
「…お前今日飲みに行くぞ、飲み」
「へ？飲み？」
突然の提案に一瞬びっくりして聞き返したのだけど、徳永は特に気にする様子も無く
「いつまでもうだうだ言ってないで気分転換でもして気持ち切り替えろ」
そんな事を言ってくる。徳永なりの気遣いらしく、それがとてもありがたかった。
私は茶化すように
「申し出はありがたいんだけど、私に用事があるかどうかも聞かないの？」
と言えば徳永も分かっているようで
「彼氏もいない奴が週末どこにいくってんだよ。いつもの居酒屋でいいよな。」
なんて言ってくる。
「はいはい、そうですよー。仕事で手一杯ですから彼氏作る余裕なんてありませんし、っと出来た」
「お、出来たか。チェックは怠るなよ」
「今度は大丈夫。ちゃんと確認したから」
プリンターが修正したデータが印刷された紙を吐き出したので課長の元へと持って行く。
「よし、ちゃんと修正出来てるな」
「本当にお手数お掛けして申し訳ありませんでした」
「今後もチェックを怠るなよ。ああそうだ竹原、お前今度の水曜の夜明けておけよ。勝田部長への接待があるからな。」
「…勝田部長、ですか？」
私は思わず言い淀んでしまう。この勝田部長にはあまり良い思い出が無い。
勝田部長の元へ仕事の打ち合わせで行くといつもセクハラまがいの

事を言われたからだ。
それも会う度に言葉が酷いものになっていっている。
その事は徳永以外誰も知らない。言える訳が無かった。
「なんだ、勝田部長と飲むのが嫌なのか？」
訝しげに見てくる課長に私は慌てて首を横に振り
「いいえ、違います！つい先日お会いした時にはそういう話をされなかったので」
びっくりしちゃって、と笑いながら言うと課長は納得してくれたようで
「ああ、ついさっき電話で話しててそういう流れになったからな」
「分かりました。水曜の夜は空けておきます」
そう言ってぼろが出ない内にそそくさと自分の席へと戻った。
折角徳永が気を使ってくれて浮きかけていた私の心は簡単に地の底へと落ちた。

きっかけは些細な事。2

「何、あの勝田部長と飲むの？」
そう言いながら徳永は枝豆を鞘から押し出している。
「そうなんだよーう。徳永ぁ、私どうしたらいいんだろー」
私はテーブルの上に顎を乗せて下唇を突き出していると、鞘から出した枝豆を徳永が私の目の前に差し出すので、口を開けると枝豆が放り込まれた。
「俺も一緒に行けたらいいんだけど、全然関係無いからなぁ」
「そう言ってもらえるだけでも嬉しいよ。ありがとう。ってかなんかいつも気を使わせちゃってごめんね」
徳永はいつも何かとフォローしてくれる。それが今はとてもありがたい。
「徳永に迷惑かけない様に頑張らなきゃなぁ」
ビールジョッキをぐいっとあおる。今日もビールが美味しい。
ごくごくと喉を鳴らしてビールを一気に飲み干す。
「ぷはぁ、んーんまいっ！あ、私生中頼むけど…って徳永？」
徳永のジョッキが空だったので注文するのか聞こうと思ったのだけど、徳永は何かを考え込むように空になったジョッキを握り締めている。
「おーい。徳永―？」
私が覗き込むように徳永を見れば、徳永は私を見つめてきた。
「俺、迷惑とか思ってないから。」
「え？」
「別にお前は仕事が出来ないわけじゃない。凡ミスは多いけど。そもそもミスが多いのも色々やり過ぎるから出てきてるだろ。今回のだって他のものも幾つか並行してやっていたから確認まであまり気が回らなくてミスに繋がったんじゃないのか？自分でなんでもかんでもしようとするからいけないんだ。もっと他の人を頼ってもいい

んだよ。」
てっきりからかう様な言葉が返ってくると思っていた私は、徳永の真面目な言葉に驚いてしまった。
確かに、徳永の言うとおりかもしれない。頼まれた仕事を考えもせずに言われたから全部やらなきゃと思い込んでいた。
徳永って凄い。そう思いながら私がまじまじと徳永を見ていたので徳永は気恥ずかしいのかみるみる赤くなっていった。
「あーくそっ。こんなのガラじゃないんだよ！すいませーん生中２つ下さい！」
「やだ徳永かーわいいー」
いつものお返しとばかりに徳永をからかってやる。
「うっさい、可愛い言うな」
不貞腐れたように言う徳永が可笑しくて、思わず顔がゆるんだ。
「にやにやすんなよ、気持ち悪いな」
「気持ち悪いって酷いなー。」
「気持ち悪いもんは気持ち悪いんだよ」
「何それ！まぁいいですけどー。けど、徳永の言うとおりだわ。私、自分でなんでもこなせるようにならなきゃっていつも思ってて。自分のキャパシティ考えずになんでも引き受けちゃってた。入社して７ヶ月経つのに今そんな事に気づくなんてやっぱり駄目だなぁ。」
「まぁそれに気づけただけでも良かったんでないの？まぁ気づかせてやったのは俺なんだけどな」
得意げに答える徳永にいたずら心が湧いた。
「徳永様にはホント感謝してます。ありがと」
ぺこりと頭を下げると徳永はまた照れたのか顔が赤くなっていた。
　その後も週末ということもあり思いきり飲んだ。
終電近くに店を出る頃には私たちはすっかり出来上がっていた。
「気をつけて帰るんだぞ」
「はいはーい。大丈夫だよー」
律儀に駅まで送ってくれた徳永に手を振って駅の改札を潜る。

あー結構飲んだなぁ。なんて考えながらホームのベンチに座った。
１１月の風はお酒で火照った体には丁度良い心地よさだ。目を瞑って風に意識を集中させていると
「あれ？竹原？」
聞き覚えのある声がした。
目を開けると目の前に課長が立っていた。

きっかけは些細な事。3

「お、お疲れ様です！」
びっくりして立ち上がると課長は苦笑しながら
「そんな畏まるな、会社の外なんだし。取り敢えず座れ」
と言って私の隣に腰掛けたので、私もつられて座った。
会社外で課長と遭遇するのは初めてで、私は酷く緊張した。
どうしよう。何を話したらいいのだろう。
「…今日も残業だったんですか？」
課長がここのところ残業続きなのは知っていたので、当たり障りのない事から聞いてみた。
「まぁな。ようやく一段落ついた所だ」
課長は背もたれに体を預けて天井を仰ぎ見るとふぅ、とため息を吐いた。
「竹原はなんでまだここにいるんだ？確か定時に帰っていたはずだよな」
そう問われてなんだか後ろめたさを感じた。
「う…申し訳ありません」
課長が残業で残っているのに自分は徳永と飲んでいたとはとても言えず、思わず謝ってしまった私を見て課長は一瞬、不思議そうな表情を浮かべたけれど直ぐにその理由に行き当たったようで
「俺の仕事が立て込んでて残業してただけだ。お前は自分の仕事を終えて退社してるんだから気に病む必要はない」
そう言ってぽんぽん、と軽くあやすように私の頭を撫でた。
不思議と悪い気はしなかった。課長は仕事中は何時もピリピリしていて近寄りがたいオーラを出しているのだけど、前に一度私に見せたこういう優しい所があるからどんなに怒鳴られても結局は憎めないなんて思っていたら、課長は慌てて
「あっ、すまん。またやってしまったな」

と言って手を引っ込めた。課長は少し気まずそうだった。
私が黙ってしまった事を何か勘違いしてしまったようだ。
頭位触られるの平気なのに。やっぱりそう言って申し訳なさそうにしている課長に和んでしまって顔を緩ませながら
「いえ、気にしないで下さい。嫌じゃなかったですから」
笑ってなんでもないと意思表示をした私を見て課長は安堵した表情になった。
「ごめんな。そう言って貰えると気が軽くなるよ」
まだまだ青いなぁ、と呟く課長の声に被せるようにスピーカーが最終電車の訪れを告げた。
「あ、電車が来ますよ課長」
電車が構内に滑りこんできたので立ち上がったのだけど、足に上手く力が入らずフラついてしまう。
「おいおい、大丈夫か？」
すかさず課長が立ち上がって私の体を支えてくれたのでヨロけただけで済んだ。
課長から微かに甘い匂いが漂った。
「あ、す、すみません」
座っている内に酔いがピークに達していたようで体が思うように動かなかった。
「…竹原、酒臭い。お前どんだけ飲んだんだよ」
ふぅ、と怒った様にため息を吐く課長に手を引かれて電車へと乗り込んだ。
あれ、課長と手を繋いでいる。そう気づいた時にはもう課長は繋いだ手を解いていて、私と課長はベンチシートにその身を沈めていた。
「竹原、いつもこんな飲み方してるのか？」
あ、まずいなぁこの感じ。課長から何時もの怒気がひしひしと伝わってくる。
思わず居住まいを正してきっちりと座るけれど、恐くて課長の顔が見れない。

「申し訳ありません。週末って事もあってつい…」
「ついじゃないだろうが！仮にも社会人なんだぞ。そもそも、社会人云々の前にお前は女なんだ。飲むのは構わないがそんなフラフラするまで飲むもんじゃない。何かあったらどうする」
声を抑えているけれど、語気の強い言葉。的確な正論に私はぐうの音も出ない。
会社外でまで課長に怒られるとは。情けないやらなんやらで自分が物凄く恥ずかしい人間に思えてきてなんだか泣きたくなった。
「それにこんな夜遅くまで飲むならタクシーを――――…」
課長は言葉を続けるけれど私はこれ以上聞くことが出来なかった。仕事でも怒られてばかりで成長しない私を、課長は呆れているのかもしれない。
そう思ったら何故か胸が苦しくなっしまって。
「…まぁ気分転換に飲むのはいいが、あまり羽目を外さないようにな…って竹原？！」
課長の驚いた声に顔を上げると、課長はオロオロと慌てだした。
ぽたり。何かがスカートに落ちてきた。
ぽたり、ぽたり。頬を伝う雫がスカートにまた落ちる。気づくと涙がぽろぽろとこぼれ落ちていた。

きっかけは些細な事。４

「あ…れ？」
「すまん竹原！きつく言い過ぎた」
課長に謝ってほしい訳じゃない。そうじゃないのに、涙を止めることが出来なくて。課長に謝られた事で更に自分が嫌になる。
「謝らないでください課長。自分が、自分が情けなくて。会社の外でまで課長のお世話になりっぱなしな自分が、物凄く恥ずかしいんです」
思っていることを口にしてしまうと心は容易く折れてしまうもので、決壊したダムの様に涙が止めどなく溢れてきた。
今までの課長に対する申し訳なさで心が一杯になる。
「そんな事気にするな。部下の教育も上司の仕事の一環だから」
そう宥めるように言いながら背中をさすってくれる課長の手が凄く優しくて。
それがまた堪らなく情けない気持ちを煽る。
「だ、って、仕事でもっ、迷惑を、かけ、てっ」
「あーもう喋るな」
しゃくりあげて上手く話せない私の言葉を課長は遮った。
「あのなぁ、竹原は気負いすぎだ。入社してまだ1年未満、迷惑かけてなんぼなんだよ。そんなの百も承知で仕事を教えてる。何のために俺がお前達の仕事のフォローしてると思ってるんだ。失敗したら次に生かせばいい。失敗は成功の元って言うだろう。」
「でもっ」
「本当に気にする必要はないって本人が言っているんだから、気にするな。これ以上何か反論しようとしたら次の会議でお前に集中砲火浴びせるぞ」
会議で延々細かい質問をされるのも嫌なので思わず口を噤んだ。
だけど分かっている。これも課長なりの優しさだって事。

ああ、凄いなぁ課長は。そんな風に考えてくれていたんだ。
そう思ったら、申し訳ないと言う思いと共にどうにかして課長の好意に応えたいと思った。
私なりに、出来ることを頑張ろう。なんでもかんでもやろうとせずに、少しずつ少しずつ出来るようにしていこう。
へこたれている場合じゃない。徳永に言われたことも参考にしながら頑張るんだ。
そう決意して、鞄から取り出したハンカチで目元を拭った私は、ふっと肩の力を抜いた。
すると、ずっと私の背中を優しく摩ってくれていた課長の雰囲気がふと柔らかくなったような気がして顔を上げると、課長の眼鏡の奥にある瞳は優しく私を見つめていて。私と視線が合うと笑いかけてくれた。
一度褒められた時に笑顔を見せてくれたけど、その時以外で課長の笑顔を見たことがなかったので、私はまじまじと課長の顔を見つめてしまった。
「な、なんだよ竹原。俺の顔に何か付いてるか？」
訝しんだ課長にそう問われて、私はつい
「いえ、課長の笑った顔って一回しか見たことなくてびっくりしちゃって」
と言うと課長は苦笑いを浮べた。
「まぁ職場ではいつも小難しい顔してるみたいだしなぁ。いつも眉間にシワが寄ってるって言われるよ」
「ああ確かに！いっつもこう、眉間に一本皺が入ってますよね。」
私が課長の真似をしてしかめっ面になり、眉間を両方の人差し指で押し上げて皺を作る動作をしたら、課長はぷっと吹き出した。
「竹原の小難しい顔は全然小難しくないな」
「なんですかそれ、私の顔に緊張感が無いみたいな言い方やめて下さい」
可笑しそうに笑いを堪える課長に抗議の視線を向けると、課長はふ

っと息を吐いてまたあの優しい目になった。
「自分で自分を追い込むなよ。何かあったら俺に直ぐ相談しろ。その為の上司だ」
「はい…、ありがとうございます」
課長の言葉に、私の心が少しだけ軽くなった気がした。
不意に車内放送が私の降りる駅の名前を告げたので降りる準備を始めると、隣に座っている課長も降りる準備を始めた。
「あれ？課長、この近くに住んでるんですか？」
「なんだ、竹原もここで降りるのか？」
ガタガタと電車は揺れながら失速し、やがて静かに停車した。
私も課長も立ち上がって、駅の構内へと出て行く。
「まぁ、ついでだから送ってやるよ」
「え、そんないいですよ。私のアパートすぐそこですし」
「もう夜も遅いから一人で歩かせるのは気が引けるんだよ」
「でも…」
「俺の気が済まないから大人しく申し出を受けろ」
そう強く言われたので私はその言葉に甘えることにした。
　等間隔に置かれた街灯が行く先を示すように夜道を照らしている。夜空を見上げると星が瞬いていて綺麗だった。
「冬になると夜空の星が良く見えていいですよねぇ」
「そうだなぁ」
なんて他愛もない会話をしながら歩く。今日は課長の事を少しだけ知ることが出来たような気がして少し嬉しいと思った。
考えてみると、課長の事を何も知らなかった。その状況は今もあまり変わらないけれど、同じ部署にいて新人歓迎会とかもあったのに、ちょっと社交辞令程度に話したきりで、後は仕事上での会話ばかりだった。
もっと前に色々話しかけてみればよかったと少し後悔した。
「あ、ここの角を曲がった公園の近くです」
「…え？公園の近く？」

課長の疑問系の問い返しに答えるように小走りに角を曲がって、直ぐに見える公園と、その斜め向かいにある自分のアパートを指差した。
「あれです。だから言ったじゃないですか、近いって」
そう言ってにっこりと笑いながら振り返って課長を見れば、なんだか気まずそうに立ち止まり、私と視線を合わせた。
「あー、竹原。もう一度聞きたいんだが、本当にあのアパートなんだな？」
「ええ、そうですよ？」
何故そんなことを聞くのだろうと不思議に思いながら課長を見ていると、課長はアパートを指差して苦笑しながらこう言った。
「あそこな、俺も住んでるんだわ」
「えっ？」
驚いてアパートと課長の指先を何回も見てみるのだけど、どう見ても課長が指差している先は私が住んでいるアパートで。
「ははははっ、自分が住んでいる所と同じ方向に進むなぁとは思っていたが、自分が住んでるアパートに部下を送り届ける事になるとは思わなかったなぁ」
課長は可笑しそうにくつくつと笑っている。
「ふふっ、確かにそんな事思いもしませんよね。なんだか可笑しな話ですね」
この変なシチュエーションに私もつられて笑った。
色々なことが起こる一日だなぁと思ってまた少し、可笑しさがこみ上げた。
　結局、課長は7階に住んでいるとの事で、その下の6階に住んでいる私は最後の最後まで課長に見送られることになった。
「今まで遭遇しなかったのが不思議だなぁ」
「ですよねぇ。こんな凄い偶然もあるものなんですね」
そんな会話をしている内に私が降りるフロアにエレベーターが到着した。

「そうだ竹原、あまり人に同じアパートに住んでいることは言うなよ？」
エレベーターを降りた私にドアが閉まらないようにボタンを押しながら課長は照れているような怒っているような不思議な表情でそう言った。
「ああ、そうですよね。社員寮ならまだしも、普通のアパートで偶々上司と部下が同じ所に住んでるって変な憶測を呼びかねませんし」
「まぁ、そういうことだ」
おやすみ、と言って課長はボタンから指を離した。
「おやすみなさい、課長」
ぺこりと一礼して顔を上げる頃にドアが閉まりだしたので、もう一度軽く会釈をして自分の部屋へと向かう。
課長と変な秘密を共有することになってしまったけれど、なんだか浮かれるような不思議な気持ちになった。

きっかけは些細な事。４（後書き）

これは！と思ったけどボツになった案

「あ…れ？」

「すまん竹原！きつく言い過ぎた」

課長に謝ってほしい訳じゃない。課長に謝られた事で更に自分が嫌になる。

「謝らないでください課長。自分が、自分が情けなくて。会社の外でまで課長のお世話になりっぱなしな自分が、物凄く恥ずかしいんです」

思っていることを口にしてしまうと心は容易く折れてしまうもので、決壊したダムの様に涙が止めどなく溢れてきた。

「そんな事気にするな。部下の教育も上司の仕事の一環だから」

そう宥めるように言いながら背中をさすってくれる課長の手が凄く優しくて。

ああ、私ってホントダメな人間。課長に宥めてもらっているし。ああもう、どうしてこうなんだろう。

課長は呆れているかもしれない。更に呆れさせてどうするの私！

「だ、って、仕事でもっ、迷惑を、がげでばっがりだじぃいいいいいいいいいいうわあああああああああん！」

「ちょ、そんな大声で泣き出す奴があるか！他の人に迷惑だろう！」

車内にいる数人の乗客が何事かと見てくるけれどそんな事はもう気にしていられない。

「泣くなよ竹原、な？迷惑だなんて思っていないから」

そう言いながら背中を摩ってくれる手は優しくて。

どうしてこんなダメな私に優しくしてくれるんだろう、と考え出したら余計に泣きたい気持ちになった。

「うわあああああん！嘘だ、課長は優しいからそう言ってくれてる

だけで、本当は迷惑だって思ってるんだァあああ」
「…お前、酒が入ると絡み好きの泣き上戸になるのかよ」
「違います！泣いてなんかいないんですからぁあああああああわあああああああああああん」
「お、落ち着け、な？泣いてない！竹原は泣いていないって分かってるから！」

なんて案もあったのですが…、却下ですよね、そうですよね。

流れ始める。1

今日も何時もの満員電車に揺られて職場へ行く。一週間の始まり。人口密度の高い車内。あまり動くと周りの人達からひんしゅくを買いそうなので視線だけ動かして辺りを見回しても課長の姿はなかった。駅の構内でも課長の姿が見えないかと探してみたのだけれど課長は何処にもいなかった。

まぁ、乗る電車の時間が同じだったらとっくの昔に遭遇していたのだろうし。

そんな事をぼんやりと考えている内に、会社最寄りの駅の名前がアナウンスされたので私は臨戦態勢に入る。電車のドアが開くと同時に出口に吸い込まれるように人の流れが出来るのでそこはそのまま身を任せて駅の構内へと歩を進めた。

一番注意しないといけないのは改札を抜けた後の北口と東口への分かれ道。ここで人が交差するように行き交うので上手く避けながら東口へと向かわないといけない。

東口を抜けると後は銘々の目的地へと人が散っていくので、ここでやっとほっと一息吐くことが出来る。

朝のラッシュは私にとっては戦場。

入社したての頃は、人の波を上手く避けられずに良く北口へと流されていたっけ。

駅を出て直ぐのコンビニはいつも混んでいるので会社近くのコンビニで何時も栄養補給用のゼリーを買う。ゼリーを飲み終わる頃には会社のビルに到着。今日も7階の営業企画部のブースへと向かう。これが何時もの朝の風景。

「おはようございます」

自分の席へと向かいながら挨拶をすると、窓際に背を向けて配置されたデスクに向かった課長が書類から視線を外さずに「おはよう」とだけ返してくれた。

やっぱり課長は眉間に眉根を寄せて険しい顔をしている。その眉間には綺麗な一本皺。
それを見て昨日のやり取りを思い出し、少し口の端が上がってしまう。
「なに朝っぱらからニヤニヤしてんの竹原。気色悪いぞ」
徳永からツッコミを受けた。
「なんでもないよ」
取り繕ってそう言ってみたけれど、徳永に見られていた事が少し恥ずかしくて素早く椅子に座った。
月曜日はいつも調子が上がらない。週末の時間の流れと週が明けてからの流れの違いに少し戸惑いを覚えるから。こればっかりは何時まで経っても慣れなくて無理矢理自分を奮い立たせて仕事を片付けていく。
１２時を１０分位過ぎて仕事がキリの良いところまで来たので私は社内食堂へと向かった。
今日は給料日前なので定食セットは購入せずに、安くてお腹も膨れるカツカレーにした。
空いている席を探してキョロキョロと辺りを見回していると徳永が手を振って合図してくれたので、徳永の向かいに座った。
「来るの遅かったな」
徳永はそう言うとプレートに載ったカキフライを１つ丸々頬張った。
「あー、キリの良いところまでやっておこうと思って。そしたら少し出るのが遅くなっちゃった」
いただきます、と両手を合わせて小さな声で呟いてから私はスプーンを手にした。
「ふーん。あ、この前はちゃんと家に真っ直ぐ帰れたか？微妙にフラフラしてたけど」
スプーンに山盛りになったカレーを頬張りながら私はどうしようか迷っていた。
課長は同じアパートに住んでいることは誰にも言うなって言ってい

たしなぁ。だからと言って課長と遭遇したことを徳永に言うのはダメだろうか。
だけど私はどうしても課長の凄さを話したくて、同じアパートに住んでいる部分だけ話さなければ良いと思い徳永に昨日の帰りの出来事を話した。
「で、励ましてもらったと？」
既に食べ終わった徳永は食後のお茶を飲んでいた。
「そうなんだよね。もうホント自分が情けなかったよ」
私はしょぼくれながらフォークに持ち替えて豚カツを頬張った。
「やっぱりタクシーで帰らせた方がよかったな。しっかし課長もまた面倒見がいいと言うかなんと言うか」
そう言って徳永は苦笑した。
「課長ってやっぱり凄いよねぇ。皆の事を考えているんだよ。色々と」
「まぁなぁ、あの人2年前に32歳で課長に昇進したらしいけど、それがウチの会社の最年少昇進記録になっているみたいだし」
「えっ、何それ」
私は驚いて徳永を見れば、徳永ははぁ、とため息を吐いた。
「そんなの皆知ってるよ。お前位じゃないの？知らなかったの」
呆れ気味にそう言われて軽くへコんでしまう。
全然知らなかった。私って本当に何も知らないんだ。
「まぁ竹原は自分の事でいっぱいいっぱいだろうしね」
そうしれっと言いのける徳永を軽く睨め付ける。
でも本当の事なので言い返せない自分がなんとも言えず、黙ってしまった私を見て徳永は肩をすくめた。
「本当の事言ってごめん」
「そこなにかフォローを入れるところじゃないの？」
私が笑いながら拗ねた仕草をすると徳永は至極真面目な顔をして
「フォローして欲しいならするけど。あー、竹原は不器用なだけだもんな」

と言われた。
「それフォローになってないしどうせ不器用ですよ。」
徳永を見るととても愉快そうに笑っていた。
こういう時の徳永はとても生き生きしている。からかい上手と言うかなんと言うか。
仲の良い他の同期にも同じ事をしているから、特に勘に触るような事も無いのだけど。
逆に、同期として気軽に接して貰えているようで嬉しい。
「そんなんだと可愛い女の子が寄ってきても逃げられるんだからね」
私がそう言っても徳永はどこ吹く風で
「そんなヘマはしないよ。好きな女の子には優しい質でね。じゃ先戻るわ」
と言って徳永は立ち上がった。
「はいはい、そーですね」
「仕事、遅れるなよ？」
そう言われて食堂の時計を見れば、時計は1時5分前。
話に夢中だった私のお皿にはまだカレーと豚カツが半分程残っていて。
「そういう事は先に言ってよ徳永！」
もう既にいない徳永に聞こえるはずもない抗議の言葉を零して、慌てて残りを食べた。

流れ始める。2

夕暮れに沈む街はオレンジ色に染まり、朝と違ってゆったりとした足取りの人々が駅へと向かう。
今日は、駅前のスーパーのお惣菜が安くなる日だからスーパーでお惣菜を買っていこう。
そんな事を考えながら歩いていると
「竹原！」
と誰かに呼ばれたので後ろを振り向くと課長が私に近づいて歩いてきた。
「お疲れ様です課長」そう言って会釈をすると課長は右手を上げて
「おうお疲れ」と返してくれた。
課長がそのまま歩き出したので私も一緒に肩を並べて歩く。
「この時間に帰るのが久々過ぎてなんだか違和感を感じるなぁ」
「そうですよねぇ。ここ何ヶ月かずっと残業されてましたよね」
右隣を歩く課長を見上げると課長は私を見て苦笑いを浮かべた。
「休日出勤をあまりしなくて済んだのがせめてもの救いだったな」
「ホントお疲れ様でした」
「まぁ次のプロジェクトが立ち上がったらまた残業続きになるだろうがな」
「束の間の休息ですねぇ」
私がそう言うと課長は
「仕事に出てるから休息とは言えないだろう」
と溜息を吐いて笑った。
朝と同じ位の人が乗った電車内。私と課長は流れに流されて乗り口と対面になっている反対のドア側へと押しやられていた。
そんな状態なものだから、課長とも必要以上に距離が近い。
対面の状態で身動きも取れないからとても気まずい。
私は目線を何処に向けたら良いのか分からず、課長のネクタイのス

トライプの数なんて数えてみたりしている。
電車に乗ってからずっと、課長のシトラスと何か甘い匂いが混じった香りが私の鼻孔を擽ってくる。
この前駅で遭遇した時も同じ匂いがしたっけ。
「満員電車も久々だな」
小さな声で課長が呟いた。
満員電車に乗る事があまり無いのだろうか。
「そう言えば課長って朝何時の電車に乗ってるんですか？同じ所から乗るのに今まで一度も見たこと無いのが不思議だったんです」
私も同じように小さな声で課長に尋ねた。
「ああ、会社に7時半に着くように電車に乗っているからな」
「結構早めに出社されてるんですね」
だから今まで遭遇することが無かったのかと納得した。
「課長ってホント仕事が好きなんですねぇ」
感心しながらそう言うと課長は自嘲の色が混じった笑い声を漏らし
「そんなんだから彼女にも逃げられるんだよなぁ」
と、落ち込んだ声で言った。
あ、何か地雷を踏んでしまった？
何かフォローしなきゃ。そう思った私は慌てて
「課長はすっごい面倒見が良いから良い人が必ず見つかりますよ！」
と言った。数秒の沈黙。すると突然課長はくくっ、と吹き出した。
あれ？私何か可笑しな事言ったっけ？そう思いながら顔を上げて課長を見上げると、課長は笑いを堪えていた。
「面倒見が良い奴が必ず良い人を見つけられるなら世の中の男は皆彼女持ちだぞ」
「えっ、あっ、そうですよね…」
フォロー失敗。こういうフォローをしようとすると何時も的はずれな事を言ってしまう。
イレギュラーな事への反応が鈍いのも私の欠点だ。
「そう落ち込むな。竹原なりに励ましてくれたんだろ？ありがとう。

」
あ、また。眼鏡の奥の課長の瞳はとても優しくて。優しい眼差しで私を見下ろして笑いかけてくれた。仕事中には絶対に見せない表情。そう言えばすごい近くにいるんだった。
急に私と課長の距離を思い出して恥ずかしくなる。思わず顔を俯かせると、丁度車内アナウンスが降りる駅の名前を告げた。
　課長が先頭に立って進路を作ってくれたのでそんなに苦労する事もなくホームに降りることが出来た。思わずほっとため息を零す。
「あー、窮屈だったな」
隣を歩く課長は心底嫌そうに言うものだから思わず顔が綻ぶ。
「そうですねぇ。まぁいい加減慣れてきましたけど」
「俺はあれには一生慣れないな」
そう言う課長をちらりと覗き見ると、いつもの課長だった。
なぜだか少しホッとした。
「あ、そう言えば今日駅前のスーパーのお惣菜が安いんですよ」
私は気持ちを切り替える為にそんな他愛もない話を切り出した。
「へぇ、そんなのがあるんだな。全然知らなかった」
「あのスーパーのお惣菜、すっごい美味しいんです。特に唐揚げがすっごいジューシーなんですよ。あとお弁当も種類が豊富で」
意気揚々と語る私に課長は怪訝そうな表情を浮かべながら
「竹原は自炊はしないのか？」
と、訪ねてきた。
「あー…えっと…時々やってます」
しどろもどろにそう答えてみたけれど実は料理だけはどうしてもダメで。
自分で作ったものがどうしても美味しく感じられず、いつもお惣菜とかで済ませる様になってしまった。
曖昧に笑う私を見た課長は一つ溜息を零した。
「竹原、今日の夕飯ウチで食っていけ。作ってやるから」
「いいえそんな！お申し出は有難いのですがお手間を取らせてしま

うので私の事は気にしないで下さい！」
慌てて首を左右に小刻みに振りながらそう言っても課長は引かなかった。
「1人分も2人分もそこまで変わらん」
「でも、ホント申し訳ないですし」
流石にそこまでしてもらうのはかなり気が引けるので私は辞退しようとそう言うのだけど、課長は全く意に介さない様子で
「一人で食べるのも飽きていた所だ。それに料理作るのも好きだしな」
なんて言いながら駅の構内から外へと出る。
外は既に暗くなっていて家々の灯が煌々としていた。
スーパーは直ぐそこ。私はどうしたものかと思案していると、課長は立ち止まった。
「…あー、考えたら迷惑だよな。いきなり上司の家に行って食事をするのも」
立ち止まって課長を見上げると苦笑いを浮かべていた。
「いいえ！迷惑だなんて思っていません！むしろこちらが迷惑を掛けているようで申し訳ないんです」
私はあたふたと慌ててそう言うと課長は少しの間、眼鏡の奥の瞳で私の感情を推し量るように真っ直ぐに私を見て
「本当に？」と尋ねてきた。
すかさず私はこくこくと頭を上下に振り
「本当ですっ。私人に作って貰ったご飯が大好きで、手作りのご飯とかもう単語を聞くだけで物凄くわくわくするんですけど、課長は上司ですし、ご迷惑になるかと思うと気が引けてしまうんです」
私も誤解して欲しくないので真っ直ぐに課長を見てそう言うと課長は、にっといたずらっ子みたいな笑みを浮かべた。
「じゃあ問題無いな。竹原は夕飯をウチで食べていくように」そう言ってまた課長は歩き出した。
「あ、あれ？課長、私の話聞いてましたか？」

私も課長の後を追いかけて歩き出す。
「問題無いだろう。俺は迷惑だなんて思っていないし竹原も、一緒に食べたくないって訳でもないんだから」
「そういうモノなのでしょうか…」
私の納得していない様子を見て課長は
「気にするな。俺が料理の腕自慢したくて誘っただけだ。料理が好きなんだけど、誰にも振る舞う機会が無くてな。そこで竹原に白羽の矢が立っただけだ」
と言った。
ここまで言われてしまうとこれ以上断るのも逆に失礼な気がして。
私は課長の申し出を受ける事にした。

流れ始める。3

課長の部屋は7階の角部屋だった。
間取りは同じ2ＬＤＫなのだけど、一つ違うのは窓が一つ多い事。
しかも憧れの出窓。
それにしても。課長の部屋は片付いていることは片付いているのだけど、やや雑然としていた。
雑誌と本が部屋の隅に纏まって積まれていたり、カウンターキッチンのカウンターの上にコーヒーメーカーや挽かれたコーヒー豆の入ったパック、お砂糖といったものがちょこちょこ置かれている。
もっときちんとした部屋を想像していたので少し拍子抜けしてしまった。
「あー、あまり部屋の中を観察しないでくれ」
別の部屋でＶネックの体にフィットしたダークグレイのセーターと濃い目の色のジーンズに着替えてきた課長が少し照れた表情でそう言うまで私はあちこちに視線を向けていた。
「す、すみません！」
慌てて見回すのを止めると、課長は苦笑いしながら
「まぁ、ソファーにでも座って待ってろ」
とソファーを勧めてくれたのでスーツのジャケットを脱いで座ることにした。のだけど、落ち着く訳もなくて。
上司が料理をしているのに自分だけ座っている訳にもいかず再び私は立ち上がり、台所へと向かった。
「課長、何を作るんですか？」
そう言いながらキッチンに入ると、課長は冷蔵庫の中から食材やタッパーを取り出していた。
「座ってろって言ったろ？竹原は落ち着きが無いなぁ」課長はそう言いながら笑って「先週久々に作り置きや仕込みが出来たから色々食べさせてやれるぞ。何か嫌いな物はあるか？」と訪ねてきた。

「私は特に好き嫌いは無いので大丈夫ですよ」
「そうか、なら何出しても大丈夫だな」
課長はそう言って、五徳が2つ乗ったガスコンロにフライパンと水を張った鍋を置いて火をつけた。
そして、てきぱきとまな板と包丁を用意し、セーターの袖を捲り上げて野菜を洗い始めた課長の慣れた動作に、一瞬何故台所までやってきたのか忘れかけたけれど、当初の目的を思い出す。
「何かお手伝いしましょうか？」そう尋ねたら課長は洗い終えた野菜をまな板の上に乗せて
「足手まといになるからいらん。テレビでも見ていろ」と一蹴されてしまった。
「うう…酷いです課長。私だって包丁くらい握れます」
すごすごとソファーへ戻りながらそう呟くと課長はぷっと笑い声を漏らした。
「竹原の場合は本当に包丁を握るだけだろう？」
「…大人しく料理が出来るのを待ってます」
まぁその通りなので悔しいけれど反論は出来ない。
実家でも何回か母の手伝いをしたことがあるけれど何時も最終的に台所を追い出されていたっけ。
テーブルに置かれたリモコンに手を伸ばしてテレビを点けると、何時も見ている刑事ドラマが始まっていた。
ゆったりとソファーに背中を預けてぼんやりとテレビを眺める。
今日も眼鏡が素敵です。と心の中でエールを送ったり、相方とのテンポの良い掛け合いをくすくす笑いながら見ていたのだけど事件現場の調査が始まった頃、私にも事件が起こった。
睡魔が私の意識を乗っ取ろうとしてきたのだ。
初めてお呼ばれした部屋で寝こけてしまうのもかなり失礼だ。と考えながら私は睡魔と戦った。瞼が下へ降りようとする度に一生懸命瞼をどうにか閉じないように意識するのだけど、座り心地の良いソファーに身を預けているとそれも徐々に効果が無くなっていく。終

いには自分の頭がカクン、となる度に瞼を開く状態になってきた。
不味いな、目を閉じないようにしないと――――…。
　不意に遠くで誰かが会話している声が小波の様に聞こえた。ポンポンと温かい誰かの手が私の頭を撫でる心地よい感触。あ、気持ちいい。思わず上がる口角。このまま撫でていて欲しいな。そんな思考が頭を過ぎる。
ふわりと甘い香りが漂い鼻孔を擽った。この匂い、何処かで嗅いだ事がある。何処で嗅いだっけ？
そんな事を考えていたら急に唇に何か暖かくて柔らかいものが触れて――――これは、何？唇？なんで唇が――――…。
その刹那、覚醒する意識。勢い良く瞼を開く。
途端にテレビの音が洪水の様に溢れて耳へと流れこむ。テレビは怪しげな人物が主役の刑事に尋問を受けている場面を映し出していた。
あれは、夢？ぼんやりとする頭を目覚めさせようと小刻みに頭を左右に振る。
「丁度良かった。ご飯出来たぞ」
そう言いながら課長はソファーの前のテーブルに座ろうとしていた。
「あれ？え、ああっ！すみません課長！私寝ちゃってました」
慌てて謝りながら立ち上がると、課長は特に気にする様子も無く
「そんなの知っているよ。まぁ気にするな。取り合えず冷めないうちに食べよう」
と課長の向かい側の席を手で指し示した。
「あっ、はい」
変な夢を見てしまった。しかも他人の部屋で。私は恥ずかしさを感じながらも指し示された場所へと座り、器に入った料理に目をやる。
「うわ…、これ全部課長が作ったんですよね？」私は目の前に置かれた料理を見て感嘆の声を上げた。
白米、ほうれん草とわかめの味噌汁、みじん切りにされたキャベツの上に乗った豚肉のしょうが焼き、人参とごぼうのきんぴら、大根と人参が千切りになった酢の物、レタスにきゅうりとトマト、粉チ

ーズが乗ったサラダ。
家庭的な料理が私の目の前に繰り広げられている。
「俺以外に誰が作るんだよ。ほら、食べろ食べろ」
はにかんだ表情の課長は眼鏡を右手の人差し指で押し上げてから両手を合わせて「いただきます」と言った。
「あっ、いただきます」
私も両手を合わせた後、お箸を手に取った。まずは生姜焼きに手を伸ばす。
お箸で豚肉でキャベツを包み込むように持ち上げて、そのまま口の中へと運ぶ。
美味しい。お肉の中までタレの味が浸透していてほっぺたが落ちそう。お肉も丁度良い焼き加減で。思わず顔が緩む。
「どうだ、味は？濃くないか？」
課長はやや不安げな表情で私の様子を伺っている。
私は勢い良く首を横に振り「いいえ！すっごく美味しいですっ」と勢い良く言うと、課長は私の勢いに驚いたのか目を瞬かせると、ふっ、と笑い「そうか、なら良かった」と言って、眼鏡の奥の瞳を優しげに細めた。
またあの瞳だ。不意に電車での記憶が蘇る。シトラスの混じった甘い匂い。
それと同時に私は夢の中の匂いの答えに辿り着いた。さっきの夢の匂いは課長の香りだ。それに気づいた瞬間私の顔は熱くなった。
なんて夢を見てしまったんだろう。私は酷く狼狽した。急激に早くなる鼓動。何を意識しているのだろう。たかだかそんな夢を見ただけで意識してしまうなんてどうかしている。
そう思うのだけど、鼓動は煩いままで。
意識をそちらへ向けないようにする為、私は食べることに意識を集中した。
　食事を食べ終わった後食後のお茶を少し飲んで、私はあまり長居するのも悪いと言って課長の部屋を後にした。部屋に戻るとほっと

溜息が漏れる。
ちゃんと普通に振る舞えていただろうか。食事の間会話を交わしていたのだけど、何をしゃべっていたのかあまり覚えていない。少し心配なのだけど、課長も特に私の様子を訝しむ事も無かったのでそこは大丈夫だろう。
それにしても、あの夢は一体何。私は思わずソファーに倒れこむ。妙にリアルだった夢。唇の感触が蘇って思わずジタバタとソファーの上で身悶える。
「はぁ…」
なんだか妙に疲れる1日だった。

流れ始める。4

「いただきます」
「はい、召し上がれ」
今日も課長の部屋にお邪魔してご飯を御馳走になっている。
会社最寄りの駅で課長と遭遇して、一緒の電車に乗り、昨日と同じ様なやりとりの後（今回は忘年会で一発芸やらせるぞ、と言われた）こうしてまた課長の部屋に来ることになった。
今日は白米、茎わかめと油揚げのお味噌汁、大根おろしの付いたアジの開き、オクラとなめこの和え物、かぼちゃのそぼろあんかけ、それに柚子の皮が入った白菜の浅漬け。
やはり昨日と同じ様に家庭的な料理が目の前に繰り広げられていて、私は顔が緩むのを止められない。
「課長、良い奥様になれますよ」
茶化すように私がそう言うと課長は少し不機嫌な顔になり
「煩い、早く食べろ」と言ってかぼちゃを乱暴に自分の口へと放り込んだ。
そう言った課長の耳は少し赤くなっている。どうやら恥ずかしさから来る態度みたいだ。
私は口元が緩みそうになるのをどうにか抑えて、おくらとなめこの和え物に箸を伸ばした。
「ああそうだ竹原、明日の接待の事なんだが」
「ぁあ、はい」
忘れていた訳では無いのだけど、なるべく考えないようにしていたので不意打ちを食らって少し声が上ずってしまった。
けれどそんな私の様子には課長は全く気づいていない。
「勝田部長は酒豪だから、あの人のペースに合わせて飲んでると痛い目みるぞ」
「あ、はい分かりました」

内心ほっとしながらそう返事してはみたのだけど、明日の事を考えると心に疲労感がどっと押し寄せてきた。
　終業直後のオフィスは、あちらこちらで人の話し声が絶えず波の様に聞こえてくる。
言葉という形を成さない（時折単語は聞こえるけれど、やはりそれは断片的で余程集中しないと何を話しているのか分からない）音に耳を傾けながら私は、この後の事を考えていた。
勝田部長のセクハラが課長が居ることによって出て来ませんように。そう願わずにはいられなかった。
勝田部長のセクハラは、物凄くねっとりとしていて湿っぽい。セクハラと言ってはいるけれど、これがセクハラなのかどうかも実は私自身も分かりかねている。
「彼氏とはどうなの？　」とか「最近ご無沙汰？　」とか直接的な言葉は無い。まだソッチの方が可愛げがある。
「そのネックレス良く似合っていますね。竹原さんは鎖骨のラインが綺麗だから鎖骨を強調してよく映えています」といったような、身体的な特徴を言い交えながら褒めたりしてくる。最初は全く気づかなかったのだけど、言われる回数が徐々に増えてきて違和感を感じる様になった。今では相手先に出向く度に言われている。
他の人が聞いたらなんて事は無いかも知れない、寧ろ自意識過剰と言われかねないのだけど私はどうも苦手だった。現に私も最初は気づかずに徐々に違和感を感じはじめたのだから他の人がそう思っても無理は無い。
いかにもモテそうな渋いおじ様タイプだから社交辞令のノリで言っているのかもと思った時もあったのだけど徳永曰く「そんなエロ目線の社交辞令があってたまるか」と一蹴された。
そんな微妙な状態なので私は徳永以外の誰にも相談することが出来なかった。
私は言い様の無い嫌悪を感じながら無駄だとは分かっているけれど会社を出るのを少しでも伸ばしたい為に、のそのそと帰り支度をし

ていると向いの席の徳永が立ち上がって今まさに帰ろうとしていた。羨ましい。羨望の眼差しを向けていると徳永が視線に気づいたのかこっちを見ると苦笑いを顔に浮かべた。
「なんて顔してるんだよ」
「だって、この後の事を考えるとかなり憂鬱なんですよ」
ため息混じりにそういうと、徳永はほんの少しの間考える仕草をして
「ああそうか、今日だったな勝田部長の接待」と言った。
「そうなんだよねぇ。昨日からもう憂鬱で憂鬱で」
「今日は課長もいるから向こうも変な事は出来ないだろうし、料理を楽しむ位の気持ちで行ってこい」
「そうするよ。今日は高級中華だしね！あ、私そういうレストランって実は行くの初めてなんだ」
努めて明るく振る舞いながら徳永に笑ってみせると、徳永はふっと息を吐いた。
「あまり深く考えずに聞き流せよ？」
「うん、分かった」
私がそう返事した所で、課長が私の席にやってきた。
「竹原、そろそろ行くぞ」
スーツの上からコートを着て手には鞄を持っている課長は直ぐにでも出られる、といった状態だった。
「あっ、はい」
それを見た私はおもむろに椅子から立ち上がると、徳永は
「それじゃあ課長、お先に失礼します。竹原もお先」
と、言って廊下へと向けて歩き出した。
「おう、お疲れさん」
「お疲れー」
先に家路につく徳永の背中を見て少し羨ましく思いながら私は、課長と共に接待の会場へと向かった。
　最初の場所は課長が予約した割りと有名な高級中華料理のレストラン。勝田部長とはここで合流する事になっていたので予定時間よ

り少し早めに着いていた。
個室が完備されていて落ち着いた中国風の内装。壁に漢文が書かれていたり、丸くくり抜かれた壁に瑞々しい花々が生けられた花瓶が置かれてライトアップされている。
部屋の中央に糊の効いた白いテーブルクロスが掛かった円形のテーブルが置かれていて中華料理屋で定番の回る台が乗っている。
思わずキョロキョロと見回していると
「竹原はこういう所に来るのは初めてなのか？」
苦笑交じりにそう問われて私は恥ずかしさから少し顔が熱くなった。
「はい、そうなんですよね」
照れ笑いを浮かべながらそう答えると
「まぁ俺も仕事以外ではこういう店には中々行かないしな。これからこういう機会が多くなるから竹原もその内慣れるよ」
と課長は言ってくれた。
一通り内部のチェックやレストランの人との軽い確認を終える頃には約束の時間がやってきたので私と課長はレストランの入口へ勝田部長を迎える為に向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4090y/

些細な事。

2011年11月28日09時46分発行